

## 33

## 常陸の郷医・山田甫庵の事蹟

——《百腹図説》の成立と伝播に関する考察——

長野 仁

神戸大学大学院医学研究科 内科系講座小児科学分野 ゲノム医療実践学部 医学研究員

## 1. 緒言

腹診は日本で独自に発達した診察法で、その史の変遷は不明な点が多いが、最大の障壁はやはり《百腹図説》であろう。広義の《百腹図説》は、狭義の①『百腹図説』（彩色図譜）と②『秘録百箇条』（口訣：衆方規矩を冠す）および③『五十腹図説』（彩色図譜＋口訣：金瘡妊婦痘瘡を冠す）の総称だが、②の巻頭に置かれた慶長7年（1602）の曲直瀬道三（1507～94）の序文が憶測を呼んで史実を曇らせてきた。演者は①の巻末の「諄先生『夜話艸』曰……」から始まる附記に着目し、『夜話艸』の現存を確認した。諄先生こと山田甫庵が18世紀に活躍した常陸の郷医であることを突き止めたが、『日立医事史』等にも全く登場しないのは惜しい限りである。茨城大会の開催にあたり、知られざる郷医の事績を掘り起こし、《百腹図説》の成立と伝播についても考察した。

## 2. 山田甫庵の事蹟と《百腹図説》の成立と伝播

『夜話艸』は、甫庵の遺言を門人の多田章甫（玄瑞）が筆記したもので、彼の序によれば、甫庵は西浦の人で鍼術の妙手でもあった。序の認められた安永8年（1779）に甫庵は没したとみられる。章甫は師の敬称に「叟」を用いており、甫庵の生年は元禄・宝永頃（1700年前後）と推測され、よって吉益東洞（1702～73）と同世代の医家ということになる。

甫庵の与えた『免書』には「ハヶ切紙、三十一ヶ切紙、“百腹診之伝”并“附録”、仙神白蛇伝、右通免之者也」とあり、①『百腹図説』と附録（恐らく②『五十腹図説』）を伝授していたことが窺われる。また、『夜話艸』には古方による誤治を契機に後世方へ転向した挿話がみられ、「古方家の腹診術、数十に過ぎず」と批判し、腹状図の量的拡充の必要性を訴えている。

《百腹図説》にまつわる学統を示した『医道伝来系脈』は2系統あり、キー・パーソンは共に井上九翁（春了・賢巖・向丹院）という医家である。1つの系統は九翁の門人として山田甫庵（春悦）と前田春策を併記するが、別の系統は春策のみで甫庵の名はない。これは、《百腹図説》が甫庵系と春策系に分かれて伝播していったことを示唆する。

九翁以前は、零溪・伯詢愚性→古溪・田代三喜→一溪・曲直瀬道三→二溪・玄朔→三溪・玄鑑→杉浦利正（玄鑑次男）→向陽院愚庵（春沢）という系譜で、どうみても加上説（後発の学説がその正当性を誇示するため、先発の学説より古い時代に起源を求める）による権威付けの産物でしかない。最後の向陽院愚庵は、どうも幕府医官・井上玄徹（交泰院：1602～86）の孫にあたる井上伝庵（春沢）を想定しているようである。かつて、大塚敬節は初代・道三が『五十腹図説』を起草したが未完に終わり、2代目・玄朔が増補改訂して『百腹図説』を完成させたと論じた。演者は、《百腹図説》は東洞流古方の影響下にある山田甫庵と前田春策の共著で、2人は九翁の父とみなされる愚庵を介して曲直瀬道三の学統に連なろうとしたのではないかと考察する。

## 3. 結語に代えて 一常陸の国学者・色川三中と《百腹図説》一

土浦の国学者・色川三中（1802～55）は、有効な民間療法や無名な村医たちの妙法が埋もれていることに不満を抱き、家業の薬種商の傍らそれらの採集を積極的に行った。とうぜん、郷医の手による《百腹図説》や『夜話艸』もその対象であった。これを鑑みつつ加上説による脚色を除去すれば、そもそも《百腹図説》は腹診の起源論争に寄与する史料とは言い難い。むしろ、常陸の地域医学史および18世紀後半の腹診史の研究に活用すべき文献ということになる。

※当演題は、平成20～22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「漢方腹診書・鍼灸流儀書に関する書誌研究」(課題番号：20520580, 研究代表者：長野仁)における研究成果の一環である。